

フェリス女学院大学の英語インテンシブ・コース に対する学生の意識の継続調査

—アンケート調査による少人数教育の意義の再確認—

佐藤 あずさ

1. はじめに

2017年の前期の終わりにフェリス女学院大学の英語のインテンシブ・コース（以後、英語インテンと表記）を履修している学生を対象に、コースへの期待や現状、そして改善などに対する意見をアンケートを通して初めて調査した。その結果、「クラス分け、レベル、教員、授業内容においてポジティブに捉えられていることがわかった。また、各スキルやコースの修了に対する意見をを通して、学生の英語に取り組む意欲がとても高いことが明らかになった」（佐藤、2018）。

その後、2017年の後期と2018年の前期の終わりに、計2回継続したアンケート調査を行った。その結果と第1回のアンケート結果とを比較し、学生の意識が時間とともにどのように変わったのか、また英語インテンの同じ時期に学生が感じていることを探ってみることにした。後述するが、3回ともアンケートの回収率が良くない。調査自体の有効性を疑うことができるが、学生の意識を知るという側面に焦点を当てることを目的とし、少ないデータをそのまま使うことにした。

フェリス女学院大学における英語インテンは1996年度に導入され、「外国語に強いフェリス」を実践する「先進的な言語教育」の一貫である。英語インテンの履修を希望する学生は、1年前期中にプレイメント・テストを受け、上位180名がその成績によって10のレベル別クラスに振り分けられる。1年後期から4セメスター続けて、合計18クラスを履修する。

内訳は、1年後期に6クラス（Speaking、Listening、Reading、Writing、Language Development、講読）、2年前期に5クラス（Speaking、Listening、Read-

ing、Writing、Language Development)、2年後期に5クラス (Speaking、Listening、Reading、Writing、講読)、3年前期に2クラス (Speaking、Reading) である。18クラスすべてにおいて単位を習得すると修了証が発行される。

2017年度まで、プレイスメント・テストとしてTOEFL ITP (International Testing Program : 団体向けTOEFLテスト) を利用していた。入学した年の前期にこのテストを1回受けてクラスを決め、それから学年が変わる前 (後期) のセメスターの終わりにテストを受け、英語インテン中に計2回クラス分けを行っていた。2018年度からはCASEC (Computerized Assessment System for English Communication : 英語コミュニケーション能力判定テスト) を採用し、入学した年の前期に1回受けてクラスが決まった後、毎学期の終わりにテストを受けて毎学期クラス分けが行われるようになった。

2. 方法

第1回のアンケートはGoogleを使って作成し、指定のWEBアドレスにアクセスすることでアンケートに答えられるインターネット・アンケート調査方法を利用した。反省点はいくつかあったが、同じ結果を得るためと、協力いただく教員の負担を最小限するために、第2回と第3回ともあえて同じアンケート方式を採用し、再度多くの囑託と非常勤の教員にWEBアドレスの配布の協力をいただいた。

第1回のアンケートは、「英語インテンシブ・コースについて」という表題で、質問は日本語で8項目28問あった。最初の項目では、学生の学年と英語インテンを選んだ理由をたずね、第2から第6項目にかけて各スキルの授業の満足度や要望などをきいた。第7項目では、在籍するレベルとプレイスメント・テストに対する意見をたずね、最後の第8項目では、インテンをやめたいと思ったことがあるか、続ける理由は何かと、履修相談で学生から相談されることを逆に質問として問いかけた。

第2回のアンケートの内容は、第1回のアンケートに入れるのを忘れてしまった「講読」を第5項目として追加した。第3回のアンケートは、回答する学生の効率性を考えて2年生用と3年生用に分けた。2年生用は、2018年の前期の授業

に講読がないので第1回のアンケートと同じものを使用した。3年生用には、各スキルの授業についての項目を、SpeakingとReadingのみにした。また、2018年度よりプレイスメント・テストとして利用していたTOEFL ITPがCASECへと変更になったため、プレイスメント・テストに関する質問を2年生用と3年生用共に変更した。

第2回目のアンケートは2017年後期の、3回目は2018年の前期の最終2週間で行なった。また、計3回のアンケートすべての冒頭には「匿名になるので、安心して答えてください。」と記載し、アンケートに答えることで成績などに不利にならないことを伝えた。

3. アンケート回答数

2017年後期に行なった第2回のアンケートでは、合計37人の回答を得ることができた。そのうち26人が1年生で、11人が2年生である。この第2回のアンケート実施時点での1年生英語インテン履修者数は180人、2年生は160人であるから、回答率は1年生は全体の14.4%、2年生は6.8%となる。

2018年前期に行なった第3回のアンケートの回答数は合計36人（2年生は13人、3年生は23人）であった。この時点の英語インテン履修者数は2年生155人、3年生130人であるから、回答率はそれぞれ全体の8.3%、17.6%となる。第1回から第3回まで、実施したアンケートに対して得られた回答学生数は表1の通りである。

（第1回のアンケートをまとめた「フェリス女学院大学の英語インテンシブ・コースに対する学生の意識と今後の課題」（佐藤、2018）で2016年度入学の英語インテン在籍人数合計が155人となっているが、160人の間違えである。ここに訂正する。）

4. 2016年度入学学生の英語インテンに対する意識の推移

2016年度入学の学生に対しては、英語インテン履修期間4セメスターのうち、最初のセメスターを除く3セメスター連続でアンケートを取ることができた。この1年半の時間の中で、学生の意識はどのように変化しただろうか。

表1：第1回から第3回までのアンケート回答学生数

	第1回（2017年前期）	第2回（2017年後期）	第3回（2018年前期）
2015年度入学 英語インテン 履修回答学生数	[3年生，英語インテン 4セメスター] 7人 (在籍人数合計：126人)		
2016年度入学 英語インテン 履修回答学生数	[2年生，英語インテン 2セメスター] 45人 (在籍人数合計：160人)	[2年生，英語インテン 3セメスター] 11人 (在籍人数合計：160人)	[3年生，英語インテン 4セメスター] 23人 (在籍人数合計：130人)
2017年度入学 英語インテン 履修回答学生数		[1年生，英語インテン 1セメスター] 26人 (在籍人数合計：180人)	[2年生，英語インテン 2セメスター] 13人 (在籍人数合計：155人)

(1) 英語インテンへの期待

「今のところ英語インテンは期待通りですか」という質問に対して、英語インテン2セメスター目の第1回のアンケートの時には、「期待以上です」「期待通りです」と答えた学生が全体の26%だったが、第2回では36%、第3回では57%と、次第に満足度が増していく様子が見える。これは「あまり期待通りではありません」「期待外れです」と答えた学生数が28%から18%、13%へと減っていくことでも裏付けられる（図1）。

(2) 英語インテンの良いところ

英語インテン2セメスター目の終わりに行なった第1回のアンケートでは、「ネイティブの先生がいる」と「友達が増えること」が英語インテン良いところであるという回答が多かった。一方第2回のアンケートでは、「英語を学ぶ時間が多い」が一番の理由となり、第3回では、「英語を学ぶ時間が多い」と「ネイティブの先生がいる」の2つがトップになった（表2）。

しかし、上位4つの理由（「少人数の授業」「ネイティブの先生がいる」「友達が増える」「英語を学ぶ時間が多い」）は第1回から第3回までのアンケートで共通している。このことは、学生が感じている英語インテンの価値が一貫している

図1：今のところ英語インテンは期待通りですか。

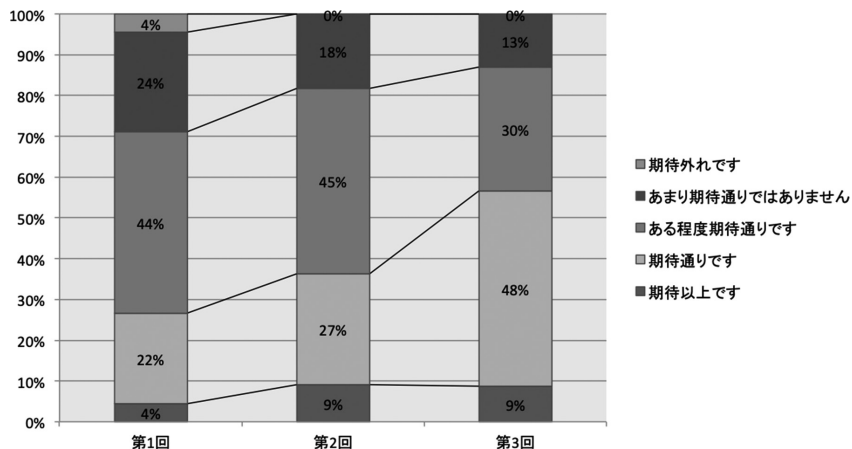


表2：今までの英語インテンで良いところはどこですか。(複数回答、コメント可)

(2016年度入学英語インテン履修者学生)	第1回	第2回	第3回
少人数の授業	53%	64%	65%
ネイティブの先生がいる	① 67%	55%	① 74%
友達が増える	① 67%	45%	57%
英語を学ぶ時間が多い	60%	① 91%	① 74%
先生との距離が近い	44%	36%	52%
友達から刺激を受けることができる	44%	18%	52%
English Centralが使える	31%	18%	4%
留学に役に立つ	13%	18%	30%
学校の外でも英語を勉強するようになった	13%	18%	13%

ることを示している。

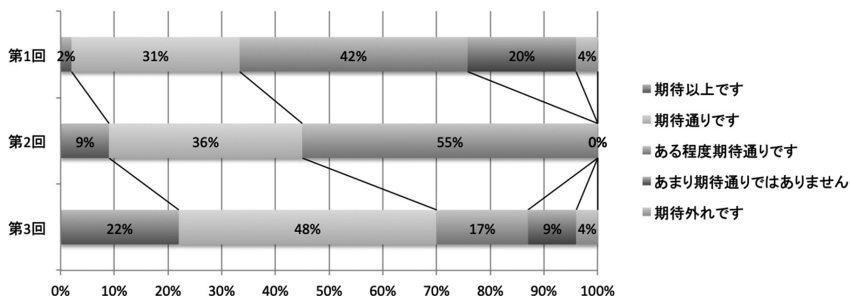
(3) 各教科の満足度

2016年度入学の英語インテン履修者は、2017年の前期は5クラス (Speaking、Listening、Reading、Writing、Language Development)、2017年後期に5クラス (Speaking、Listening、Reading、Writing、講読)、2018年前期に2クラス (Speaking、

Reading) を学習した。3セメスターで共通して学習したSpeakingとReadingの2科目に対する満足度の推移をみる。

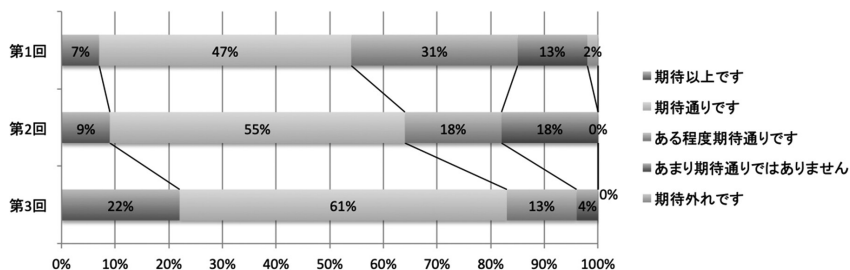
Speakingは、「期待以上です」「期待通りです」のポジティブな意見が第1回から第3回にかけて、33%から45%そして70%へと伸びている（図2）。平均伸び率は18.5ポイントとなる。

図2：今学期のSpeakingの授業はどうですか。



Readingは、第1回ですでに好意的意見（「期待以上」と「期待通り」）が54%から始まっているのに関わらず、64%そして83%へと満足度が次第に高くなっている（図3）。平均伸び率は14.5ポイントとなり、SpeakingとReading 2科目の平均伸び率は16.5ポイントである。

図3：今学期のReadingの授業はどうですか。



ListeningとWritingは2017年の前期と後期の比較しかできないが、Listeningは40%から54%に満足度が上がるのに対し（図4）、Writingは53%から36%に落ち

てしまった (図5)。

図4：今学期のListeningの授業はどうですか。

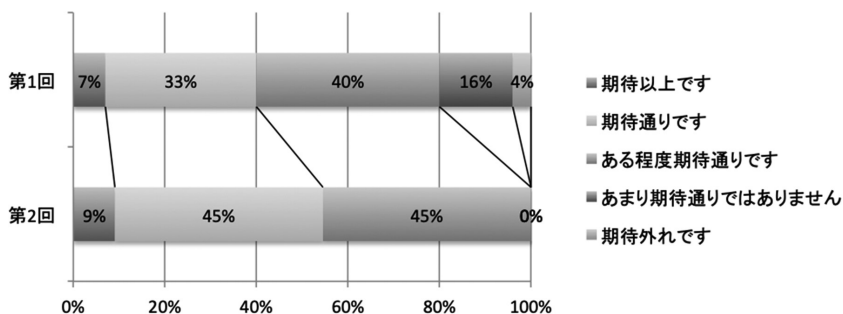
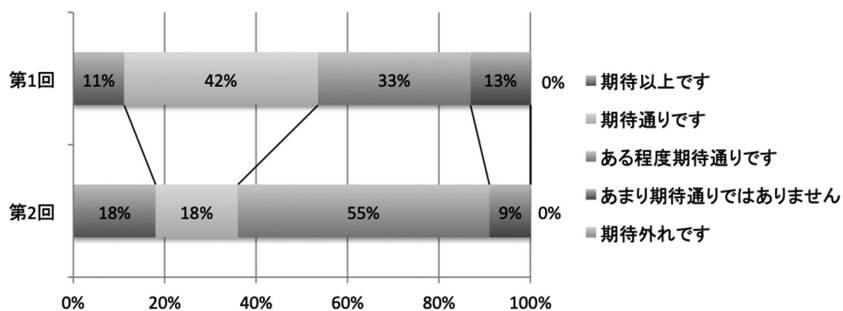


図5：今学期のWritingの授業はどうですか。



第1回のWritingの授業に対する改善して欲しいコメントとして「提出したらすぐに訂正をして確認したいです」「フィードバックを個別で欲しい」「ライティングの授業がネイティブだとイマイチ内容が入ってこず、結局習得が充実しない。ここは日本語で解説してもらいたいと思う」「2年になり書く機会が減った」など、具体的なものが多かった。

第2回では、「もう少し的確に色々な指示をしてほしいです。時々言ってることが理解できません」「添削回数を増やしてほしい」「先生に聞きたいことがあっても時間が足りない」というコメントがあった。

コメントの量やコメント全体から判断すると、特に第2回のアンケートを行なった2017年後期の授業内容が主な原因とは考えにくい。アンケートに回答し

た学生の履修クラスの偏りと、もともとの回答者数の少なさが影響していると考えられる。

5. 2017年入学学生の各教科への評価の推移

2017年入学の英語インテン履修者に対しては、2セメスター連続でアンケートを行うことができた。第2回のアンケート回答時は、英語インテン1セメスター目で、第3回のアンケートの時は英語インテン2セメスター目を終える時である。この2セメスターで、各教科への評価がどのように変化したかを、共通しているSpeaking、Listening、Reading、Writingの4教科において比較してみる。

Speakingについては、満足度（「期待以上です」「期待通りです」）が英語インテンを始めた最初のセメスターの43%から61%に伸びている（図6）。Listeningは54%から69%に、Readingは58%から69%に、Writingは54%から76%にと、すべての教科において、学生の期待セメスターを追って満足度が伸びた（図7-図9）。

図6：今学期のSpeakingの授業はどうですか。

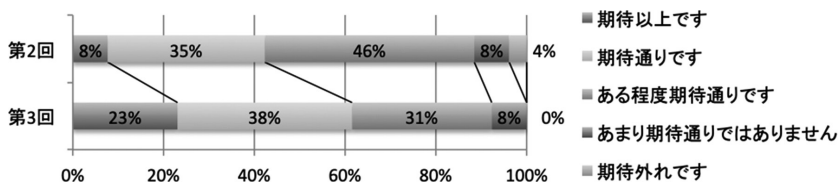
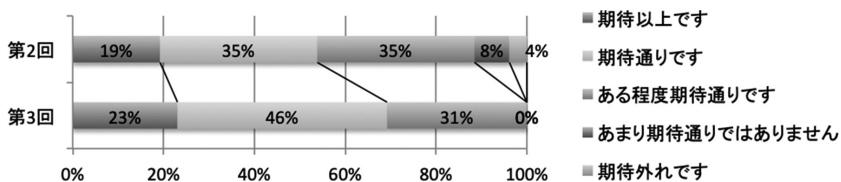


図7：今学期のListeningの授業はどうですか。



平均伸び率は16ポイントで、2016年入学の英語インテン学生のSpeakingとReadingの3セメスター平均伸び率の16.5ポイントとほぼ同様である。

図8：今学期のReadingの授業はどうですか。

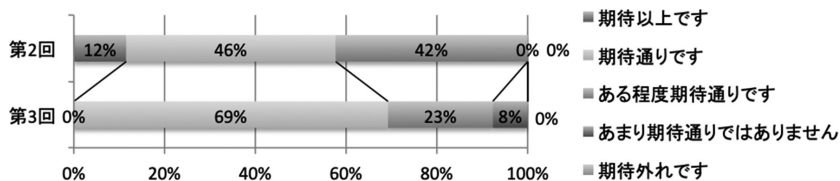
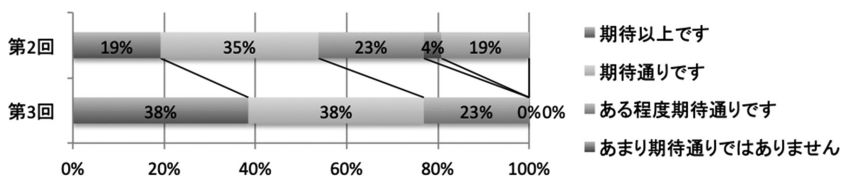


図9：今学期のWritingの授業はどうですか。

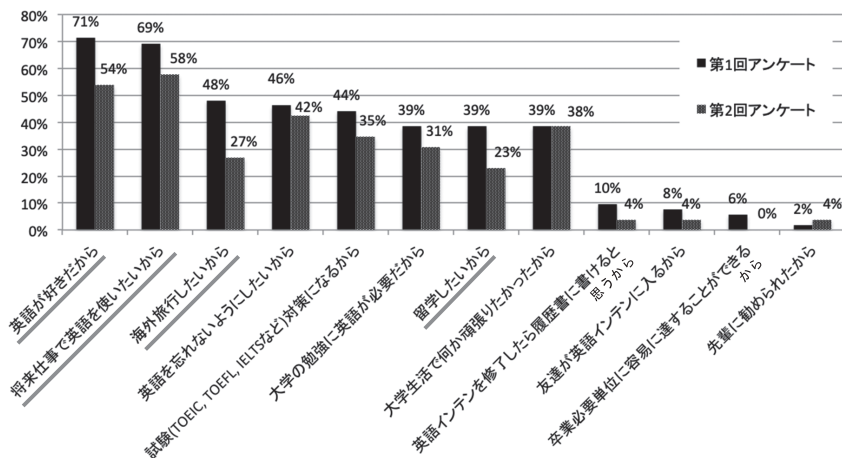


6. 英語インテンに入った理由と期待

第1回のアンケートでは、その時点で英語インテン2セメスター目の2年生が45人、英語インテン4セメスター目の3年生が7人回答した。つまり、英語インテンを始めてすでに2セメスター近く以上時間が経っている時点で、英語インテンに入った理由を思い出して答えた意見になる。この意見と、2017年度後期に初めて英語インテンを始めた2017年度入学生の26人の意見（第2回アンケート）とを比べて、英語インテンに入った理由に変化があるのか比べてみた（図10）。

第1回では、「英語が好きだから」に続き「将来仕事で英語を使いたいから」がトップの理由だったが、第2回の1年生では、それが逆転しているのが分かる。また第2回では、「海外旅行したいから」「留学したいから」が第1回と比べて半分近くになっている。これは、第2回では、それ以前よりも英語への実用的な期待が高まっていることを意味している。また留学や旅行は金銭的な負担が大きいのかもしれない。心的要因は毎回高い動機である反面、社会的要因が英語インテンへの期待に変化をもたらしている可能性がある。

図10：英語インテンに入ろうと思った理由はなんですか。（複数回答、コメント可）



7. 英語インテン第2セメスター

第1回のアンケートで回答した2年生（2016年度入学）は、英語インテン2セメスター目の終了時であった。第3回のアンケートで回答した2年生（2017年度入学）も英語インテン2セメスター目の終了時である。3回のアンケートの中で、同じセメスターの英語インテンを履修している学生は、この2グループだけなので、この同じ時期の学生の英語インテンの各スキルの授業に対する気持ちを比較してみた。

Speaking、Listening、Reading、Writing、Language Developmentの5つのすべての授業に対して、第1回より第3回のアンケートの方が「期待以上です」「期待通りです」の合計が平均23ポイント高く、どの授業に対しても好意的である（図11-図15）。

同じ時期に同じアンケートを行なったにも関わらず、第3回のアンケートに回答した2017年度入学の英語インテン履修学生で、すべての授業において「期待外れです」と回答した者はいなかった。

英語インテンの良いところで挙げられた上位4つの理由：「少人数の授業」「ネ

図11：今までのSpeakingの授業はどうですか。

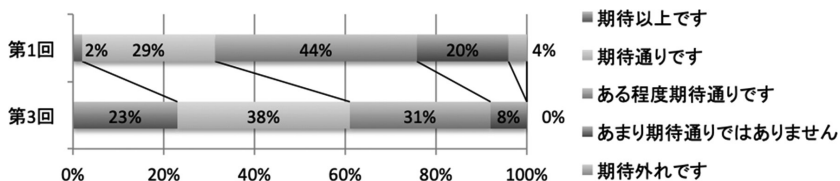


図12：今までのListeningの授業はどうですか。

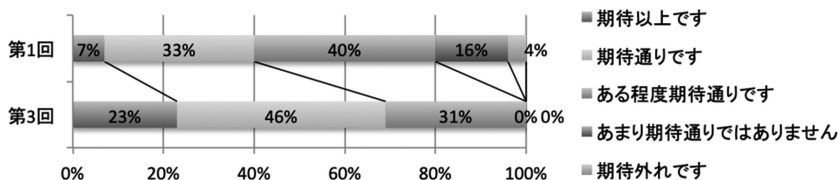


図13：今までのReadingの授業はどうですか。

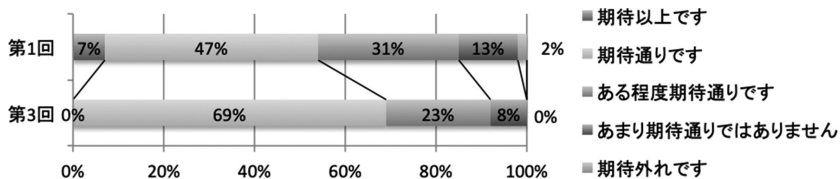


図14：今までのWritingの授業はどうですか。

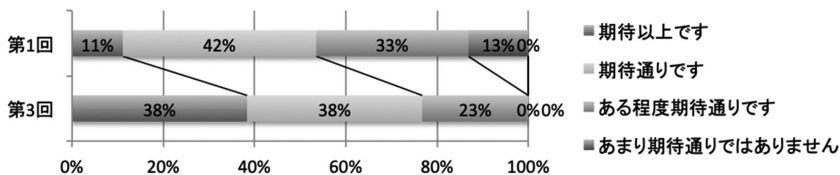
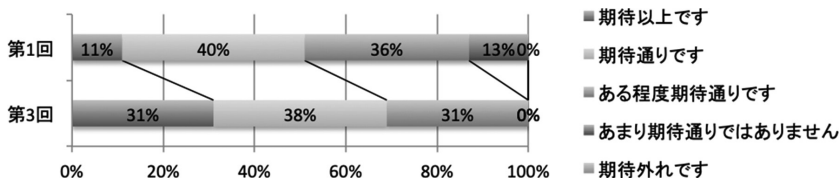


図15：今までのLanguage Developmentの授業はどうですか。



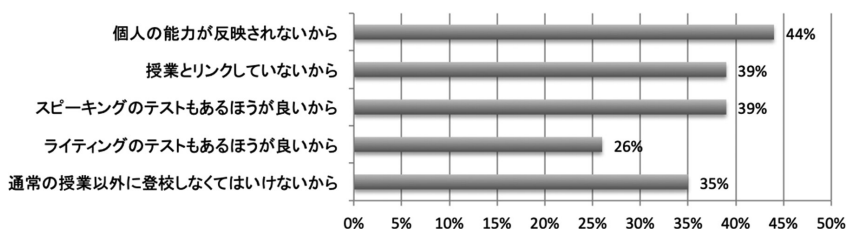
イティブの先生がいる」「友達が増える」「英語を学ぶ時間が多い」が、セメスターを重ねるごとに英語インテンを履修している価値として浸透し、英語学習に学生が意欲的に取り組んでいる様子が見えてくる。

8. 新プレイスメント・テスト：CASECとクラス分けについて

2018年度から、それまでプレイスメント・テストとして使用していたTOEFL ITPからCASECへの変更となり、それに伴い毎学期の終わりにプレイスメント・テストを行ってクラス変更することになった。

第1回のアンケートの結果で、TOEFL ITPを「適切であり、変更しなくて良い」とした学生は全体の56%いたが、変えた方が良いという学生は44%にのぼった。変えた方が良い一番の理由として「個人の能力が反映されないから」が挙げられた（図16）

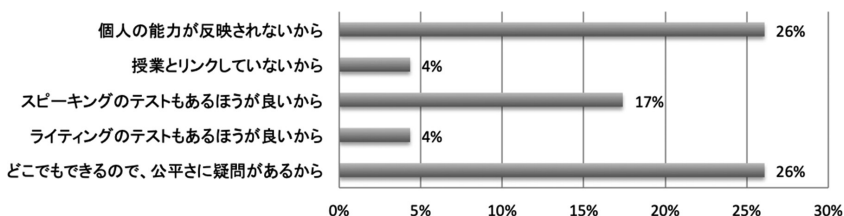
図16：テストを「変えたほうが良い」と答えた理由は何ですか。（複数回答、コメント可）
[第1回アンケートより]



2018年度にCASECへ変更になり、TOEFL ITPと両方のテストを経験した2016年度入学の学生へのアンケートでは、CASECについて「適切であり、変更しなくて良い」とした学生は全体の57%で、変えた方が良いという学生は43%であった。これは第1回とほぼ同じ満足度であった（図17）。つまりTOEFL ITPとCASECに対する学生の評価はほとんど変わらなかった。

CASECへの不満として、TOEFL ITPと同様「個人の能力が反映されないから」が一番の理由となったが、「どこでもできるので、公平さに疑問があるから」も同位で理由に挙げられた。

図17: テストを「変えたほうが良い」と答えた理由はなんですか。(複数回答、コメント可)
[第3回アンケート2年生回答のみ]



TOEFL ITPはリスニングとリーティングのみのテストで、受験時間が半日かかった。一方CASECは、語彙と表現の知識を問う空所補充とリスニングを4肢択一方式で行うパートと、ディクテーションをして書き取りをするパートからなるテストで、インターネットとコンピュータがあればどこでも受験することができる。TOEFL ITPの内容はアカデミックで、時間がかかるテストだった一方、CASECはもっと実用的でテスト時間も短い。CASECの方が大いに学生に受け入れられると予想していたが、違ったようだ。学生としては、テストには自分の能力が正確に反映されると感じる事が内容や時間よりも大切なことがうかがえる。

また、第1回でも第3回でも「スピーキングのテスト」がないことに不満があることは、英語インテン履修の目的である「英語を仕事で使いたい(=話したい)」という実用的な目標に、テストが直接応えていないことを表していると想像できる。

次に、クラス分けについて聞いた。

第3回のアンケートで回答した2017年度入学の学生のみ、2018年前期の終わりにプレイスメント・テストを受けて後期のクラス分けが初めて行われる。そのことを69%適当だと考えているが、驚くことに23%はもっと頻繁でも構わないという(図18)。アンケート実施時点では、その学期のプレイスメント・テストがまだ行われていないので、セメスター毎にクラス分けが行われることが十分に理解されていないのかもしれない。

クラス分けの頻度に関しては、実際に毎学期ごとにクラス分けを経験してからのデータでないと、本当の学生の気持ちは汲み取れないかもしれない。しか

図18：クラス分けの頻度（1年前期・後期、2年後期）についてどう思いますか。
[第3回アンケート2年生回答のみ]

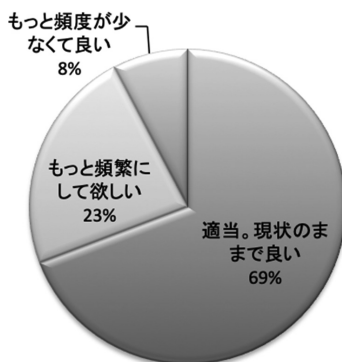
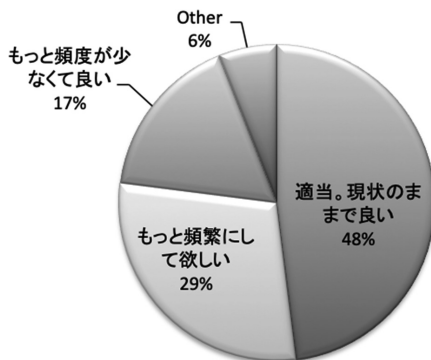


図19：クラス分けの頻度（1年前期・後期、2年後期）についてどう思いますか。
[第1回アンケートより]



しながら、以前の制度では48%が適当と答えている（図19）のに比べると、新しい制度の方がより肯定的に受け取られていることは分かる。

9. 結果と課題

合計3回のアンケートを通して分かったことは、第1回から英語インテンが学

生に好意的に受け取られていたことが継続しているだけでなく、時間の経過とともに満足度が増していることである。各教科に対する平均満足度伸び率は16ポイントにもなる。このことは、2016年度英語インテン履修者の3セメスター連続のアンケートからみえた、「英語インテンの良いところ」がしっかりと学生の学習と心理面を支えていることを示している。

1クラス20人以下の少人数教育では、きめ細やかな教育ができるために、学生の意欲を高めて成果が上がる（朝日新聞、2017）。フェリスでは、英語インテンの1クラスは常に18人以下であり、学生の満足度から、まさに少人数教育の成果が証明されたように思う。

英語インテンは最初1クラス18人から始まるが、コース変更をする学生が毎セメスター多数おり、英語インテンの履修学生は減っていく。そのため、セメスターが進むごとに1クラスの学生数も減っていく。2016年入学の英語インテン履修者は、180人から始まって、160人となり、最後のセメスターでは130人となった。つまり、最後のセメスターでは1クラスの平均学生数は13人であった。人数が少なくなっていくことが、学生のより高い満足度につながるのかの関係性は分からない。ただ、少人数だから「英語を学ぶ時間が多く」、「友達が増え」、そして「ネイティブの先生」のきめ細やかな指導が受けられる現状がしっかりと結果に反映されていると考えてよいと思われる。

しかしながら、学生の「改善してほしい」とする意見を真摯に受け止め、今後の英語インテンのコース全体やそれぞれの授業を考えるときに考慮することも必要だ。Speakingの授業には、「話す機会を増やしてほしい」「教科書の難易度を上げて欲しい」「ネイティブの先生がよい」など意見があった。Listeningの授業には、「簡単すぎる」「もっとたくさん問題を解きたかった」「ネイティブの先生の発音が聞きたかった」などの意見があった。Readingの授業には、「課題が多い」「教科書の難易度を上げて欲しい」「テキストの内容をもっと簡単にしてほしい」「新聞やウェブサイトなどタイムリーなものも題材にしてほしい」などが挙げられた。Writingの授業には、「宿題、課題が多い」「書き方をもう少し詳しく教えて欲しい」「ネットワークトラブルが多いので、ちゃんと宿題が提出できているか分からない」などがあった。Language Developmentの授業には、ネットアカデミー（注：インターネットで英語を自習できるe-learning

ソフト）は家でできる、授業でやってほしい、課題が多い等と、意見にばらつきが見られた。講読の授業に関しては、「少人数で行いたい」「もっと文を読みたかった」「日本人の先生で残念」「時間の無駄」との意見があった。

もちろん各教科で良かったことも多く意見が寄せられた。良かったコメントには、担当教員の名前を上げるケースが多数あったことから、満足度は教員と学生との関係、教員のスキルや工夫に授業が大きく左右されていると想像できる。

少人数教育の鍵として、金子は「(ひらく 日本の大学) 少人数×低学費、着目すると」(2016)の中で次のように述べている（ST比とは、学生の人数に対しての教員数のこと）：

ただ単にST比が低ければいいというわけではなく、教育の中身に注目する必要がある。ST比が低い大学では、学生のリポートに教員がきめ細かくコメントを書いて返すなど、意味のあるフィードバックができていくかが重要だ。

本当にきめ細かく学生を指導できてこそ少人数教育の価値がある。学生からみた教員の「当たり外れ」をできるだけ無くし、教員がよりよい指導法を実践するためにも、教員同士の意見交換や指導方法の共有などをする必要があるだろう。教員は嘱託教員と非常勤教員を含め、毎年入れ替わる。教員の貴重な経験や知識を失うことなく継承しながら、英語インテンとしての全体のクオリティを高める続ける努力をしていくための仕組みを早急に構築する必要性を感じる。

また、英語インテンに入る理由に変化があるのであれば、それを敏感に察知して対応することも重要ではないだろうか。英語インテンは、留学を含めた大学で必要なアカデミックな英語を集中して学習することを目的とした時期があった。Writingではアカデミックエッセイを書くことを中心とするなど今もその傾向を継承している点がみられる。しかし、学生にとって英語インテンに入る理由が、より将来の仕事を見据えたものになる傾向が今後も続くのであれば、コースの内容や目標を丁寧に見直すことも、学生の要望をさらに満たしていくために無視できないことだろう。

2018年度から始まった新しいブレイスメント・テストは、期待したほど歓迎

されていないことが分かった。その一方新しいクラス分けの頻度は、学生には概ねより良い改善だと受け入れられた。スピーキングのテストがないことに対する不満解消を第一の優先事項として、英語インテン全体の目的やクラス分けをする意義などを考慮しつつ、テストやクラス分けの頻度にベストな方法をこれからも模索することが大切だ。

10. まとめ

英語インテンを履修している学生にアンケートをしようと思ったのは、自分が嘱託教員として英語インテンの運営を行う際に、毎学期英語インテンに関わる教員には改善したいことなどの意見を聞くのに、学生からは意見を聞く機会がなかったからだ。アンケートを2017年度から3セメスター連続で行った結果は、予想以上の驚きであった。英語インテンは、これほどまでに期待と好感と満足として学生に捉えられているとは思わなかった。しかもそれは一時的なものではなく、セメスターが進むにつれて増していた。フェリス女学院大学の英語インテンは成功していると言えよう。

反省点として、アンケートの実施方法や内容に改善を加え、より大きく正確なデータを取れるようにしなければならない。今回アンケートの配布に同意、協力していただいた教員には心から感謝するが、回答率が低かったことは否めない。そして回答した学生がどの程度同じクラスの在籍者で、異なるクラスの多様性が反映できているのかは分からない。協力してくれる教員と学生の負担を最小限にし、短時間で意見が反映できるようにアンケートの作成と配布にできるだけの努力をしたが、個人で行うには限界があった。今後より良いアンケートを作成し、英語インテンの発展に貢献したいところだが、私は嘱託教員としての任務を2019年度に終えるので、今後このアンケートを続けることができない。

大学が学生に対して行っている「授業に関するアンケート」が、第1回のアンケートを行った2017年前期以降内容や方式が変わり、以前より多くの意見が集まっているときいた。このアンケートが英語インテンの現状を明らかにするものであるのかは知らないのだが、学生にとっても、教員にとっても、大学にとってもよりよい英語インテンのコースの維持と改善ができるように、大学の

組織が継続した調査を行うことを期待する。

[参考文献]

- 朝日新聞「ひらく 日本の大学：細やか教育する大学は」2017年12月12日付朝刊，13版18頁。
- 朝日新聞・河合塾共同調査「(ひらく 日本の大学) 少人数×低学費、着目すると」朝日新聞デジタル，2016年12月2日。
- 佐藤あずさ（2018）「フェリス女学院大学の英語インテンシブ・コースに対する学生の意識と今後の課題 —アンケート調査にみる少人数教育の評価—」フェリス女学院大学紀要53号，pp. 67-94.